

目次

第23回大会・自由報告の募集	1	2010年度研究集会報告	2
在中通信	4	事務局からのお知らせ	7
新入会員の声	7		

■日中社会学会第23回大会
自由報告の募集

浅野慎一・根橋正一（大会担当理事）

日中社会学会第23回大会は、6月4日（土）、5日（日）の両日、関西学院大学において開催されます。

つきましては、下記の要領で自由報告の募集をいたします。皆様からの多数のご参加をお待ちしております。

記

（1）報告申し込み（報告題目と概要）

期限：4月10日（日）

*準備の都合上期限厳守をお願いいたします。

方法：報告題目と報告概要（4～5行）を日中社会学会事務局へ、原則としてEメールで申し込んでください。所属、連絡先の電話番号及びFAX番号もお知らせください。

（2）報告要旨の提出

期限：5月10日（火）必着

方法：封書にて日中社会学会事務局へ郵送。
書式等：お送りいただいた報告要旨をそのまま複写いたします。次の書式でお願いします。

①A4用紙横書き2枚。

②1ページ40字×40行。明朝体10.5ポイント。余白は、上下30mm、左右28mm。

③報告タイトル、氏名、所属を明記のこと。

（3）自由報告受付先（報告要旨送付先）

*自由報告についてのお問い合わせもこちらまでどうぞ。

〒186-8601

東京都国立市中2-1

一橋大学大学院経済学研究科

南裕子研究室

E-mail: yminami@econ.hit-u.ac.jp

電話：042-580-8810

FAX：042-580-8799

■2010年度研究集会報告

於：名古屋大学

2010年12月18日（土）15:00～18:00

張玉林 教授（南京大学）

「現代中国における『賤農主義』の形成—革命イデオロギーから発展主義信仰へ」

報告：池本淳一

早稲田大学スポーツ科学学術院

本研究集会では、『転換期の中国国家と農民（1978-1998）』等の著作で知られる南京大

学の張玉林教授をお招きして、現代中国において農民・農業を軽視する「軽農」と、「農業が嫌」だから農業を手放す「嫌農」現象が、いかにして農民・農村・農業を蔑視する「賤農主義」にまで至ったのかを、新中国成立以後の政治・経済の変遷を踏まえて解説していただきました。以下、その様子を会員の皆様にお伝えしたいと思います。

張教授曰く、「賤農主義」の源泉の一つは革命イデオロギーの中にあるという。かつてマルクスは農民を保守的で分散的な階級と見なし、またレーニンは小農経済を「資本主義の土台」と見なしたため、農民階級は革命の主体たりえない、と見なされてきた。他方、毛沢東は農民・農村を革命の主体とした戦略・政策を展開することで、革命を成功させた。しかしその毛沢東も、建国後は次第に農民を保守的で利己的な階級と見なすようになった。そして「中華人民共和国憲法」においては労働者階級を「指導階級」とする一方、農民階級を労働者階級の指導を受ける立場にあると規定した。さらに1953年公布の選挙法において、一人の全人代レベルの代表を選出するのに、農村は都市の八倍の人口が必要と規定することで、農民階級の政治的な発言力を制度的に抑制した。

加えて、農業集団化への非協力や「盲流」による都市の治安・失業の悪化といった、農民の政策に対する無理解や「利己的」行動により、毛沢東は農民を社会主義革命を理解していない「遅れた」階級として見なすようになった。こうして毛沢東は、一方では農民に対する暴力的で厳格な「社会主義教育運動」キャンペーンを通じて農民の後進性や利己性を激しく批判し、他方では農民の移住と移動を制限する戸籍制度を制定して、農民を農村に閉じ込めた。

またこの時代から、民間においても農民への蔑視が日常的に見られるようになった。たとえば「お前は本当に農民だ」「農民に似ている」といった言い回しがある種の罵倒語として使用されるようになり、テレビで農民の習慣や行動を揶揄する番組が公然と放送されるようになった。さらに社会的エリートたる知識人でさえ、農民蔑視の感情を公然・非公然にあらわすことも珍しくなくなった。たとえばあるエッセイでは腐敗官僚を非難するさいに、彼らを「小農経済的な心理に満ちた農民」と揶揄し、またある小説の中では品や教養の無さを「農民の意識と農民の癖」として描いていたという。さらにある著者に至っては一わざわざドイツ人の「偽名」を使って一、農民を「国会の「重荷」と非難し、「悪質」な彼らの移動を制限し、厳しく管理することが「文明的都市社会」を守る手段であるとさえ断言していたという。

張教授によれば、この賤農主義は90年代半ばまでに社会意識の根本まで浸透するようになったが、90年代後半以降は単なる軽視・蔑視の段階を超えて、農業・農村そのものを否定する動きさえ生み出していったという。

これまで中央指導部では、農民の政治意識の低さを非難しつつも、「農業を基礎とし」、「農村の安定と発展が中国社会全体の安定と発展の前提」であるという理念・原則が保持されていた。しかしその理念とは裏腹に、1980年代以降の農業への財政投入や、90年代における税金の乱徴収に代表される「農民負担」の増大と農民暴動の多発という現状が生み出されていった。さらに近年では多くの地方政府が、収益の少ない農業を地方の経済発展を阻害するものと見なし、農村の「消滅」や、農民を都市住民にしていく「逼農進城」政策を実施することで、農業放棄と農村消滅

を積極的に押し進めるようになった。

張教授によれば、これら地方政府の農業・農村否定には、「農業成長の限界論」、「官僚行動の論理」、「地域間の農工分業論」という三つのロジックが働いているという。「農業成長の限界論」とは、農業の発展は遅いだけではなく、成長には限界が存在するため、農業に頼るだけではなかなか農民を豊かにすることは難しい、それゆえ工業化・都市化を通じて農民を豊かにさせていこう、という論理である。これは工業化・都市化を重視するものの、それがそのまま農業・農村の軽視に結びつくものではない。しかしこれに「官僚行動の原理」が加わると、過度の農村軽視・工業重視の地方政策が生み出されるという。現在、中央政府は、各地の「発展」をその経済発展の「スピード」、すなわち経済成長率や税収増加率の伸び率を持って評価している。そのため地方の指導者は政治的な「業績」を稼ぐという「官僚行動の原理」に基づき、担当地域の収入や税収の伸びを競うようになった。その結果、各地域では経済的成長の緩慢な農業部門を切り捨て、劇的にGDPを上昇させる工業部門のみを重視するようになった。そしてその行き着く先が、一方では工業化に適した条件を持つ農村地域を「廃村」させ、開発区や都市区域として開発し、他方では工業化・都市化に不利な地域に農業を集中させるという、「地域間の農工分業」の進展なのである。これらのロジックが合わさることで、現在、中国の賤農主義は農村と農業の否定に至るまでになったのである。

最後に張教授は、現在、農民自体がこの賤農主義を内面化し、農民・農業を嫌悪するという農民の「自己否定の内面化」が進んでいるという。たとえばそれらは、農村青年の「農村を逃げたい」「農村を恨む」といった脱農村・離農志向や、大量の都市への出稼ぎに見

て取れるという。また近年、農村の土地紛争が頻発しているが、それも土地への愛着ではなく、その立ち退きの補償額をめぐるものであり、農民が自らの土地を愛しているわけではないという。こうして農民自身さえもが農業と農地を軽視し、自己否定するようになった結果、「賤農主義」は初めて現代中国における主導的な価値観となり、国家の行方から個人の行方までを左右する巨大な力」となったという。

張教授の発表後、フロアでは以下のような活発な質問・議論が行われた。

第一に、賤農主義及び農民の将来についてである。ここまで各方面と各層から「賤しい」とされ、また農民自身の自己否定をも引き出す賤農主義と、その基盤の一つとなっている農民の「不利な立場」は、今後改善されるのかについて質問が及んだ。張教授の考えでは、賤農主義が政治的及び経済的な基盤を持ち続ける以上—すなわち農民の政治的劣位と経済的格差—それらはしばらく続くであろう、ということであった。またフロアからは、この農民層の政治的劣位を覆すには、農村の人民代表と都市のそれが代表する人口数を等しくすること、すなわち都市と農村の実質的な投票格差をなくすことだ、といった意見が出された。

第二に、この「賤農主義」は、中国独特のものなのか、いわゆる近代化の過程において生じる普遍的な現象なのか、という問題についてである。張教授の発表を拝聴していると、確かに中国の賤農主義は、中国独特の歴史的背景が存在するようにも思える。たとえば張教授の著書『転換期の中国国家和農民(1978-1998)』でも指摘されていたが、初期工業化の達成と都市の安定・開発のために、50年代以降、中国では戸籍制度と人民公社の設立を通じて、農民を農村に縛り付け、食糧と

工業資源の生産に専任させてきた。またそれらが緩和・廃止された後も、鉄状価格—国家による食料の安価な統一買付と販売によって、市場価値よりも安い価格で食料を販売すること—によって、農民の収入は低く抑えられたままであった。このような制度は日本には見られない独特なものであることは確かである。しかしながら、他の国々においても、近代化の過程において、異なった形で農業・農民を犠牲にしてきた。たとえば戦後日本では過疎化や農業収入の低下、農民層解体などがあげられるだろう。それゆえ、他国・他地域にも見られる農民蔑視・農業軽視との比較を通じて、この中国的な「賤農主義」の特殊性を示す必要があるように思われる。あるいは逆に、この強烈な中国の賤農主義を、近代化が生み出す農民・農業軽視のもっとも鮮明なモデルケースと見なし、その詳細な分析を通じて、これまで他国・他地域では不明確であった近代化と「賤農主義」との関係を浮き彫りにする、という戦略もありえるかと思う。

以上、今回の張教授のご報告はこれまで「漠然と」知られていた中国の賤農主義が、いかに政治的・歴史的に根強いのかを明確に示すものであり、その点で私にとっては大いに勉強になるものでした。また比較研究による「近代化と農業」といった、スケールの大きな研究にまで広がる予感を感じさせるご報告であり、日中社会学会という比較研究を大きな「うり」の一つとする本学会の研究集会にふさわしい有意義なご報告をしていただいた張教授に、改めて御礼もうしあげます。

■在中通信

『「車」にまつわる etc.』

伊藤麻沙子
蘭州理工大学外国人招聘教師
大阪大学大学院

日中社会学会のみなさま、こんにちは。蘭州に滞在中の伊藤です。中国……というより、蘭州に来てちょうど1年が経ちました。蘭州名物の牛肉面もおいしく食べられるようになり、本場ではないものの麻辣燙も日々の常食と化し、おやつには若い女性に大人気の关东煮をほおぼるという具合で、すっかり辛い物好きになりました。この調子なので、おなかの強さに感謝しつつも、高血圧にならないように気をつけたいと思っています。

ところで、中国に来て1年ということで、今回は「車」にまつわることについて在中通信したいと思います。

「自転車王国」中国にあつて、蘭州はやや例外とっていいのかもしれませんが。なだらかな起伏の多い街なので、自転車は移動手段として、それほど多用されているとは言えないからです。では車かといえば、必ずしもそうでもありません。北京では家庭の自家用車保有率が30%に達したようですが、蘭州ではまだそこまでは至っていません。日常的な移動手段といえば、やはりバスかタクシーが主です。

始めに、バスにまつわる所感について。例によって時刻表は存在せず、所定のバス停で来るのをひたすら待つばかりです。時には30分～1時間ほど待つこともあります。バスが遅れる原因は主に交通渋滞です。この渋滞は中国各地に付き物だと思います。より現実的かつ具体的に考えれば、バスを長時間待たなければならない状況は、この渋滞問題を解決すれば済む話です。しかし、ある時ふとイライラしながらバスを待つ自分にハッと

ました。「待つ」ことを苦痛に感じているのに気づいたからです。渋滞で物理的に困っている自分からは少し離れて、この1年間、バスを待った時に、あらゆる物事が合理的に速やかに処理されることが生活の快適さにつながってゆく現代社会にあって、何事に対しても待たなくなってしまう自分と「待つ」ことの意味を改めて考えさせられました。

バスといえば、もう1つ感心していることがあります。それは、乗客が必ずとっていいほど、お年寄り、小さな子ども、妊娠中の女性などに、何の躊躇もなく席を譲る、そして譲られた人たちもまた何の躊躇もなく席に座るといった一種の道徳的慣習です。こうした行為はもちろん日本でも見られます。しかし、躊躇せずにすぐさま席を譲るか、あるいは座るかといえば、そうとも言えないのではないのでしょうか。

私の個人的な印象では、今、日本で特に若い人たちにとって、席を譲るといった行為はほんの少し勇気のいる行為ではないかと思えます。たとえば、「この人を老人とみなしていいのか」「席を譲って断られて、そのまま座り続けるのはどうか」または「今、席を譲らなかつたら、どう思われるだろうか」など、席を譲ろうと思ってから実際に席を譲る、ないし譲らないと決めて実行するまでに、心の中でいろんなことを自問してしまうように思われます。その結果、席を譲れば、良いことをしたと思って、何となく自分を褒めてしまうし、譲らなければ、何となく自分を正当化するような言い訳を考えてしまいます。

このように、日本では、特に若者はこの何でもない単純な行為1つにごちゃごちゃと頭を悩ませてしまうこともよくあるように思われます。少なくとも私はそうです。そんな私にとって、待ち続けたバスに人を押しつけてやっと乗り込んで席を取っておきなが

ら、お年寄りなどを見るやいなや何の躊躇もなく、すぐにその席を譲る中国の人々の行為は、かなり気持ちのよい、さっぱりした行為に感じられます。

次にタクシーに関して、蘭州に来てから一番驚いたのは乗車拒否です。といっても、運転手さんたちが乗せる客を選んで故意に拒否するというわけではありません。私の経験した限りでは、乗車拒否の主な理由は3つほどです。まず1つめは「ガソリンを入れに行くから」という理由です。2つめは「家に帰ってご飯を食べるから」という理由です。この場合、客の行き先が運転手さんの帰る方向と一致していれば乗せてくれます。3つめは、蘭州に来た当初、私が最も不可解に思っていた理由です。ある時、街に買い物に出かけた帰りにタクシーに乗った時、行き先を告げると「偶数だから今日はダメだ」と言われました。その後も、「偶数だから」「奇数だから」と言って断られることがしばしばありました。しばらくの間、この「偶数」「奇数」による乗車拒否は、本当に意味が分かりませんでした。後に判明することですが、彼らが言う「偶数」「奇数」とは、タクシーのナンバーの末尾の数字を指しており、その数字によって通行可能な道が毎日制限されているということだったのです。したがって、客の行き先がその日タクシーが通れない道である場合、必然的に乗車拒否になってしまうわけです。

3つめの理由による乗車拒否は、実は市内の交通渋滞を緩和するための対処法になっています。この方法によって少しでも渋滞が緩和されるのであれば、多くの人々が利用するバスの遅れも緩和され、待ち時間も減るといった理屈なのだと思います。つまり、タクシーの乗車拒否という不方便が、巡り巡ってバスの待ち時間の減少という方便につながっ

ているというわけです。とはいえ、実際には待ち時間が減少しているようには思われな
いし、タクシーに切り替えようと思うと、乗
車拒否の場合が多々あるといったふうで、と
りわけ急いでいる時には、怎么办？……没办
法啊～！状態です。

最後に、自家用車の洗車風景について。私
は現在、大学の住宅棟に住んでいます。先述
したように、蘭州の自家用車保有率は大都市
部に比べればまだまだですが、さすがに大学
教員ともなると、自家用車を持っている家庭
が多いです。住宅棟はだいたい8階建てかそ
れ以上です。1階部分は大抵の場合、車庫に
なっています。棟の部屋数に対して、車庫数
は非常に少ないので、車庫に入り切らない車
は棟の前に停めてあります。車は大変高価な
物なのでとても大事にしている様子が窺え
ます。休日になると、洗車したり、車内を掃
除したり、車体を磨いている光景をよく目に
します。洗車に関して、大学外の道路沿いに
洗車サービスを提供している店がありますが、
その店でよく見かけるのはバイクの洗車
風景です。では車はどこで洗車しているの
かと思っていたら、ある日とうとうその洗車
風景を目にしました（写真参照）。写真にあ
るように、住宅棟の下で洗車するようです。
洗車のための水は、ホースで自宅から引っ張
ってきていました。この光景を目にした時、こ
んなに長いホースがあるのか！と思って、少
し驚きました。棟の8階から垂れ下げられた
ホースは、まるで救援ロープのようでした。
大切な車をピカピカに保つためには一苦勞
といったところでしょうか。以上、今回は
「車」について、バスから乗用車に至るまで、
感じたことをありのままに書かせていただ
きました。相変わらずとりとめのない通信で
はありますが、これからも日常生活に見られ
る人々の工夫に着目してゆきたいと思って



(2011年11月6日筆者撮影)

います。再见！

■新入会員の声

郭 芳

同志社大学大学院社会学研究科
社会福祉専攻

私は1984年生まれの中国山東省出身です。大学時代は日本語を専攻しました。私の中国の大学と日本の大学は姉妹校だったため、大学二年生のときに運よく交換留学生として福島大学に留学することができました。一年間の日本留学を通して、日本の環境や日本の大学の雰囲気が好きになり、日本語をもっと上達させるために、中国の大学を卒業してから、再び日本にきました。交換留学生のときに、福島大学で日本の社会福祉の必要性に関する授業を聞きました。日本のような先進国でも社会福祉が必要なら、中国ではもっと必要ではないかと思い、社会福祉専攻を専攻することにしました。

修士課程は、中国山東省を中心に高齢者福祉施設について現地調査をし、「都市化しつつある中国農村地域における養老の現状と課題」というテーマで修士論文を書きました。論文では、農村地域では生活保護者である「貧困層高齢者」は「敬老院」で保護されていること、一方で富裕層は比較的サービスがいい「養老院（有料老人ホーム）」で保護されていることがわかりました。また生活保護者ではないが、経済条件があまりよくない「中間層高齢者」の養老問題が今後の課題であることがわかりました。以上の問題意識をもって、現在、同志社大学社会学研究科では、「中国農村地域の高齢者福祉サービスに関する研究－地域格差、階層化を解消するために」（仮）というテーマで、全国の農民が平

等にサービスを受けられるためにはどうすればいいのかを、今後は研究していきたいと思っています。

林梅（りんめい）

関西学院大学社会学研究科
大学院研究員（非常勤講師）

京都精華大学大学院において、環境社会学を専攻した2004年から2006年まで、指導教授であった嘉田由紀子先生の現地調査に同行するなかで、「生活環境主義」に感銘を受けました。以来、中国朝鮮族村を対象に調査を行って8年目になります。そのなかで、農民の暮らしの奥深さに触れ、おもに生活世界、少数民族村、当事者視点というキーワードで『国家を生きる少数民族村』という学位論文を執筆しました。農民の生活世界における土地制度、戸籍制度、村民委員会組織法の意味を再検討しました。日中社会学会では、研究関心を共有する研究者同士の多様な議論に触れることを願っております。

日中社会学会ニュースレター No.61

編 集：池本 淳一
(早稲田大学)

発 行：日中社会学会事務局
〒186-8601 東京都国立市中 2-1
一橋大学・南裕子研究室

info@japan-china-sociology.org
yminami@econ.hit-u.ac.jp
tel: 042-580-8810 (研究室直通)

fax: 042-580-8799 (共同研究室
のため南宛を明記してくださ
い)

○日中社会学会・郵便口座
口座記号番号:00140-9-161801

加入者名:日中社会学会

○日中社会学会・公式 HP

<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日:2011年3月